

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820056

研究課題名（和文） 士族が設立した士族会・旧藩奨学金団体が地域の教育・社会に果たした役割の研究

研究課題名（英文） Study on Effect of Shizoku—society and Kyu—han—scholarship—society for Regional Education and Community

研究代表者

布施 賢治 (FUSE KENZJI)

山形県立米沢女子短期大学・日本史学科・講師

研究者番号：00455007

研究成果の概要：近代に士族が設立した士族会・旧藩奨学金団体が、地域の教育・尚武意識・士族意識の形成に果たした役割について研究した。現地の図書館・文書館に赴き諸会が発行した雑誌の分析等の実地調査を行った。その結果、諸会の基本的な存在形態、明治・大正・昭和期の各段階における組織の変化、資金の調達方法の変化、人材観の変化、育英事業に対する会員・地域の人々の認識の変化等を明らかにした。そして、地域社会の教育の発展・人材育成に重要な役割を果たした点を確認した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	410,000	0	410,000
2008年度	410,000	123,000	533,000
年度			
年度			
年度			
総計	820,000	123,000	943,000

研究分野：日本近代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近代史 士族 旧藩 教育 育英事業 同郷会 華族 立身出世

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の近代日本史研究では、士族を士族の立場に即して実証的に明らかにする研究は不十分であった。

(2) しかし、1990年代以降、士族に関する研究が盛んになった。それらの研究は、士族を政治史的・思想史的・地域史的側面から実証的に明らかにしている点特徴的であり、従来の固定的な士族像を打ち破る成果を上げている。

(3) だが、不十分な面もある。

①士族を士族として一括に把握し階層差による把握が弱い。

②士族は士族としてよりも、諸会を結成し、会および会が発行する雑誌を通じて社会・地域と関係してくるが、諸会および雑誌の分析が行われていない。

③士族は明治期以降、特に教育を通じて社会進出をはかるようになるが、育英団体・士族会の育英事業の分析が、歴史社会学では行われているものの、歴史学では十分に行われていない。

④そこで、近代士族の問題を、育英事業団体・士族会およびそれらの会が発行する雑誌の言説分析を通じて、地域社会の教育・人材養成・尚武意識に与えた影響を踏まえつつ、

明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 士族および彼らが設立した士族会・旧藩育英団体の分析を行うことで、士族が地域の教育・尚武意識および立身出世意識の形成に果たした役割を地域的動向のなかから明らかにしようと考えた。

(2) それにより、近代日本史における士族の問題について、教育との関わりから、新たな視点を投げかけることができると考えた。

(3) 具体的な地域と分析対象には、史料の問題などから以下をえらんだ。

- ①山形県荘内士族が関係する「荘内館」と荘内館が発行した『荘内館報告』、酒田の本間家と旧藩主酒井家が設立した「荘内育英会」とそこが発行した『荘内育英会報告』。
- ②山形県の米沢士族が関係する同郷会である「米沢有為会」と発行する『米沢有為会雑誌』、上杉家らが設立した旧藩奨学金団体である「米沢教育会」。
- ③茨城県土浦士族の士族会である「亀城会」と発行した『亀城会会報』。
- ④長野県上田士族が関係する同郷会である「上田郷友会」と発行する『上田郷友会月報』、上田士族の旧藩奨学金団体である「大成会」。
- ⑤長野県松本土族が関係する同郷会の「松本親睦会」と発行する『松本親睦会雑誌』、旧藩奨学金団体である「信松会」。

## 3. 研究の方法

- (1) 山形県の旧米沢・庄内藩士族、長野県の旧上田・松本藩士族、茨城県の旧土浦藩士族の調査を行う。
- (2) 具体的には各旧藩士族が設立した士族会、同郷会、旧藩奨学金団体に関する雑誌・史料・新聞記事・関係者の史料などの分析を行う。
- (3) 各地域の図書館・文書館・博物館におもむき、カードなどで史料収集を行う。
- (4) 特に、以下の点に留意する。
  - ①士族の教育・育英事業・旧藩・地域・他階層に関する言説の特徴。
  - ②平民層および地域から士族会・旧藩育英団体はどのように認識されていたのか。
  - ③士族の階層性(旧身分)による考え方の相異はあるのか。
  - ④地域の教育、尚武意識の形成に士族会・旧藩育英団体がどのような役割を果たしたのか。

## 4. 研究成果

(1) 各士族会および旧藩奨学金団体の基本的存在形態を明らかにした。

(2) 士族会および旧藩奨学金団体の存在形態は、近世以来の武士身分制度、旧藩領域の

区画編成などに強く影響されていることが明らかになった。

(3) 諸会ともに、会の組織、雑誌の形態、どのような人物を送り出したいかという人材観は、明治期・大正期・昭和期で各時代の影響を強くうけ、それに応じてさまざまに変化していることが明らかになった。

(4) 時代的影響とともに、各地域固有の歴史的・地域的問題がそれらに強く影響を与えていることも明らかになった。

(5) 諸会ともに財政は時代を通して厳しく、またさまざまな理由から大正期以降になると県や郡に補助金を申請するようになる。そこでの、県や郡とのやりとりの分析が、地域における育英事業の考え方を明らかにする上で重要であることが明確になった。

(6) 同郷会と旧藩奨学金団体は、両者とも士族が中心で、育英事業を重視するなど活動内容は似ていつつも、さまざまな側面で意見の食い違い、認識の相違が存在することが明らかになった。その背景には、旧藩有力者に対する反発、育英事業遂行能力に対する懐疑などの問題が存在していることが明らかになった。

(7) 士族会および旧藩奨学金団体は、当初は旧城下町および東京在住の士族層中心に運営されていたが、大正期になると諸会ともに郡部を開拓し、郡部居住者の会員化をすすめるようになる。このような背景には以下の理由が確認できる。

- ①城下町および東京在住の士族層が、時代が下るにつれ高齢化または層としてのまとまりを失っていったため、会の運営および資金の調達に苦勞するようになった。それにつれて、旧藩意識も希薄化し、旧藩そのものが古臭いとか、時代遅れとか認識されるようになった。
- ②ただ、大正期になると、士族諸会は旧藩意識を再興すべく、新たな事業を実施するようになる。その場合、今までの会運営の方法と異なり、従来あまり重視してこなかった郡部に居住する平民層にアピールすることで、会員の増加を図り、資金調達を増大させようとした。そして、郡部に会の存在意義をアピールすることで、会および旧藩意識そのものを存続させようとした。

(8) 育英事業団体には、郡主体の会、地域の有力者が主体の会など、さまざまな会が存在していること、それらの会と旧藩育英事業団体と同郷会の関係は、郡制廃止や県への補助金申請などの節目節目の段階において、統合や資金の受入れなど、さまざまな問題が発生しており、その点の解明が地域における育英事業を明らかにする場合に重要であることがわかった。

(9) どのような学生・子弟に貸費生の資格を

与えるのかという貸費生資格は、士族会および旧藩奨学金団体の性格を明らかにする上で重要な事柄であることが明らかになった。

①旧藩奨学金団体といえども、貸費生資格は旧藩士族の子弟に限定している場合は少数であることが明らかになった。また、当初は士族層に限っている場合でも、時代が下るにつれて平民層にも資格を与えていることが明らかになった。その背景には、資金難のため、会員を平民層に拡大し、その結果貸費生資格を平民層に与えたことが大きな理由としてあった。

②奨学資金の貸費生資格は士族およびその縁故者を優先して、成績優秀者の表彰資格の場合は、士族およびその縁故者と平民層を平等に選抜する場合が確認できた。

③以上の点から、士族会および旧藩奨学金団体の規則の文言を注意深く確認することで、会の持つ性格が浮かび上がってくることを確認できた。逆に言えば、表面的には士族意識や旧藩意識は巧妙に隠蔽されている場合が多いことも明らかになったといえる。

(10) 士族会および旧藩奨学金団体が貸費した学生の出身郡村・性別・学校などの分析した結果、以下の諸点が明らかになった。

①士族会および旧藩奨学金団体が、どのような学生に学資を貸費したのかという点は、諸会の人材観に深く関係している。

②士族および旧藩奨学金団体の場合、多くは区域を旧城下町であった市・町と周辺の3・4郡という旧藩領域を区域としていたが、学資が与えられた学生の多くは旧城下町出身者であった。さらに、旧城下町でも、武士層が居住した家中といわれる地域の子弟であった。

③昭和5年から9年頃にかけての昭和恐慌の時期には、貸費生に採用される学生の出身町村の数が多くなっていることが明らかになった。このことは、特定の城下町中心採用を、この時期だけでも見直し、会の区域の町村から平等に採用したといえる。

④女性は殆んど貸費生に採用されていないことが明らかになった。

⑤郡が母体となり設立された奨学金団体では実業関係の教育機関に進学・在学する学生が多く採用されているが、旧藩奨学金団体の場合は、大学・高等学校といった高等教育機関が多くなるとともに私立大学は少数になる傾向が認められた。

(11) 士族会および旧藩奨学金団体における貸費生の選考には、会員、外部の青年層、もしくは地域において、厳しい視線が注がれていたことが明らかになった。その傾向は、いわゆる大正デモクラシー期になると顕著になるとともに、この問題は旧藩意識の問題と大きく関係していることが明らかになった。

①不平等との指摘は、当初から指摘されていた。その指摘としては、人材観にあっていない学問分野に進学する人物を採用している、裕福な家の子弟を優先的に採用しているなどである。

②このような指摘は、地域における旧藩意識の問題と大きく関係していた。旧藩意識が時代が下るにつれ希薄になるにつれ、旧藩の有力者も時代遅れの人物と認識されるようになる。そのため、選考に携わる旧藩有力者が、時代を理解していないなどと、非難の対象となってくる。

③選考過程に対する非難に対して、諸会ともに、選考過程の透明化（雑誌や地域新聞への発表）、返還困難者への優遇措置の規程などの改革で対処した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 1 件)

①布施賢治「近代山形県に設立された同郷会について―一村山会と村山同郷会を中心に―」、西村山地域史研究会市民講座、2008年9月20日、寒河江市文化センター。

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

①布施賢治「近代山形県に設立された同郷会について」、『西村山地域史の研究』、無、27巻、2009年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

布施 賢治 (FUSE KENZI)

山形県立米沢女子短期大学・日本史学科・  
講師

研究者番号：00455007

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者